

2020.10.15  
vol.83

# シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画  
を  
読む

## 本日の上映作品 『大地のうた』



10月15日(木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

インド映画のリアリズムを世界に知らしめた名匠サタジット・レイの初監督作で、各国映画祭で絶賛された「オパー三部作」の第一作。インドの寒村の貧しい家庭の少年オパーの目に映る、ベンガル地方の自然と、そこに暮らす人々の日常を淡々と描くことにより、人生と死・階級制度・インドの貧困と悲惨を静かに語りかけてくる作品。

監督: サタジット・レイ

出演: サビル・バナルジー、カヌ・バナルジー、  
コルナ・バナルジー、チェニバラ・デビ

製作: 1955年 インド モノクロ 125分

|   |               |           |         |
|---|---------------|-----------|---------|
| 『インド映画完全ガイド』<br>マサラムービーから新感覚インド映画へ          | 松岡 環/監修・編     | 世界文化社     | 778.225 |
| 『インド映画への招待状』                                | 杉本 良男/著       | 青弓社       | 778.225 |
| 『インド映画にゾッコン』<br>Masala hits star magazine   | 野火 杏子/著       | フィルムアート社  | 778.225 |
| 『インド 魅惑わくわく亜大陸』                             |               | トラベルジャーナル | 292.5   |
| 『インド、チョーラ朝の美術』                              | 袋井 由布子/著      | 東信堂       | 702.25  |
| 『インド美術』                                     | ヴィディヤ・デヘーリア/著 | 岩波書店      | 702.25  |
| 『タントラの世界』                                   | フィリップ・ローソン/著  | 青土社       | 168     |
| 『インドの細密画を訪ねて 上・下』<br>細密画が描かれた王国の宮殿・遺跡と美術館探訪 | 浅原 昌明/文・写真    | 新風舎       | 722.5   |
| 『ユニコーンを探して』<br>サタジット・レイ小説集                  | サタジット・レイ/[著]  | 筑摩書房      | 929.8   |
| 『カーストから現代インドを知るための30章』                      | 金 基淑/編著       | 明石書店      | 362.25  |
| 『モンスーンあるいは白いトラ』                             | クラウド・コルドン/作   | 理論社       | 943.7   |

## コラム『大地のうた』

### ベンガル地方の村の自然美とそこに住む人々を描いた傑作 K.M.

今回上映の作品は、インド映画界の巨匠サラジット・レイの代表作『オペー三部作』の第1作です。この作品は、1955年にインド年間最優秀作品賞を受賞し、以後、カンヌ、エジンバラ、マニラ、サンフランシスコ、ベルリンなど、様々な国際映画祭を受賞しました。日本では1966年に公開され、芸術祭文部大臣賞を受賞、キネマ旬報外国映画ベストテン第1位を獲得しました。当時淀川長治が、黒澤明の『羅生門』とともに、アジア映画を世界に認識させた「インド民族の魂の人間詩」と絶賛したのは有名です。

この作品、長々と続くベンガル語のオープニング・タイトルが終わると、1920年頃のインド・ベンガル地方の小さな村に住む貧しい一家（父親、母親、娘、居候の老女、猫・犬・牛たち）の日常が、大変ゆっくりとした時間の流れとこの地方の村の自然の中で、ドキュメンタルタッチで淡々と細やかに描かれていきます。レイ監督のみずみずしい映像感覚で写し取られた、森、池に浮かぶ蓮、雨など、次々と出てくる美しいモノクロ映像と、背後に流れるインドの撥弦楽器シタールの哀調を帯びた調べが素晴らしいです。

登場人物のキャラクターもそれぞれにとっても印象的で、特に女性の描写がよいです。父親はバラモンらしいですが、詩や創作劇を書いて成功するのを夢見るばかりで生活力は弱く、代々受けついできた立派な果樹園も、今や借金のかたにとられてしまっています。しかも急に出稼ぎにでかけて行き、何か月も、時には何年も消息が途絶えてしまうノーマルな天気があります。

母親はこんな夫によく仕え、貧しさに耐え、せめて一日に二度の食事と、一年に二着の服が買えたらと願っていますが、みじめな現実のために、そのささやかな願いも達成されそうにありません。娘のドゥルガは愛らしいですが、お転婆で隣家の果樹園から果物をかっぱらってきては、家に居候状態の老女（実は伯母らしい）にあげるのを日課としています。盗みは悪いが、心は温かいのです。居候の老女は、母親には邪魔者扱いされていますが、どこか知的で毅然としたところがあり、ドゥルガとは小さい頃からの熱い絆があるようです。

このような一家に、息子のオペーが誕生します。三部作の第一作である本作品は、オペーの誕生から少年期までの

物語なので、オペーは受け身的な役割であり、私は本作品の主役はオペーの姉ドゥルガ、準主役は居候の老女だと思っています。

本日、お出でいただいた皆さんのほとんどは初見だと思いますが、この作品、ストーリー展開やスピード感でみせる映画ではなく、今の感覚で観ると非常にテンポが遅く、上映の半分近くになっても、これといった出来事が起こらないことにいらだちを感じる人がおられるかもかもしれませんが、後半はそれなりに厳しい事態が発生します。

ただ、貧しいながらも懸命に生きる三世代の家族に、サタジット・レイは冷徹ながらもどこまでも温かい眼差しを向けています。貧困家庭を描いた作品に多く感じられる陰惨さはあまり感じられず、私はビットリオ・デ・シーカ監督の名作『自転車泥棒』の印象を思い出しました。

特に気に入ったシーンを拾い上げてみました。

- ・行商のお菓子屋さんを追いかけて行き、お姉さんが町の学校で女友達から遊ぼうと誘われるシーン
- ・居候の老女が「待っていました船頭さん。向こう岸に渡してくださいな……」と歌うシーン。
- ・オペーとお姉さんが、蓮の葉がいっぱいの池の辺で激しい雨に降られるシーン。
- ・オペーとお姉さんが銀の海のようなすすき野の中から、黒煙を吐く汽車に走り寄っていくシーン
- ・最後のシーンで、オペー一家が出払っていった崩れ屋に一匹の蛇が這い込んでゆくシーン。

### りぶら東駐車場2をご利用下さい

